るのであろうか。

全就職希望者（Q29=１）696 名（男性のみ、36%）の、32%は「自立支援センター回避組である（下表)。このグループの約３分の１（36%）は、自立支援センター以外の方法で求職活動をしているものの、同じく約３分の１（36%）は「求職活動をしていないし、その予定もない」。つまり、これらの者は漠然とした就職の希望はあるものの、実際の求職活動をする手だて、意欲に欠けている。

就職希望者（Q29＝１）のみ：

自立支援センタ希望別	n	%	求職活動をしている		する予定である		していないし、予定もない		欠損		計
経験あり	89	12.8%	40	45%	31	35%	17	19%	1	1%	89
知っており入所希望なし	222	31.9%	81	36%	60	27%	79	36%	2	1%	222
知っており入所希望あり	139	20.0%	47	34%	67	48%	25	18%	0	0%	139
知らない	246	35.3%	91	37%	85	35%	70	28%	0	0%	246
	696		168	47%	127	35%	104	29%	3	1%	361
			χ二乗=	25.13	0.0003						

就職希望者の約３分の１（自立支援センター回避組の中では、若干多い）は、漠然とした就職希望はあるものの、それが実際の求職活動と結びついていない。これらの路上生活者が、労働市場において、就職可能性があるかどうかは、また別の問題であるが、彼らの就職希望を何らかのアクションに結びつけることが必要である。しかし、就職希望者の多く（全就職希望者の 32%、実際に求職活動をしている人の中では 48%=168 人中 81 人）にとって、自立支援センターは求職活動の選択肢となっていない。つまり、自立支援センターが「路上生活者の就労による自立」を目的としているのであれば、センターは、路上生活者の中でも就職希望がある 36%しか（現実的な）ターゲットとしていないこととなり、しかも、その 36%の中でさえも、自立支援センターへの入所を希望しているのは少数（全就労希望者の 20%、求職活動中の人の 34%）である。

６．今後の希望の決定要因

前節の「今後の希望」の分析においては、比較的に年齢が低く、路上生活期間が短く、収入が低いほど「就職」を希望し、年齢が高い層ほど「福祉」の選択肢を希望していることがわかった。しかし、路上生活者の約 18%は「今のままでいい」、9%は「都市雑業」と、路上生活を継続したままの生活を「今後の希望」として挙げている。彼らは、どのような属性をもった路上生活者なのであろうか。クロス表によると、「今のままでいい」とする割合が多いのは、65 歳以上、路上生活期間が４年以上、自立支援センターの非希望者、である。収入による割合の差はあまりない。「今のままでよい」と路上生活者が考える背景には、二つの相反する理由があると考えられる。一つは、現状の路上生活がほどほどの水準であり、リスク（寝場所や道具などの資源、人間関係を喪失するリスク）を負ってまで現状を変えたくないという理由である。また、もう一つは、今後の見通しを持っておらず、「もう、どうなってもよい」「どうにもならない」という絶望感、自棄的な理由である。この二つに影響すると考えられる項目（年齢、路上生活期間、収入、自立支援センター経験、音信の